
学園革命

夜神涼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

学園革命

【Nコード】

N9647C

【作者名】

夜神涼

【あらすじ】

世の中に不満を持つ三人が自分達が住みやすい世界を作るため学園を変えていく……

序章 はじまり

「やってられねー」

そう叫んだのはいつもの学校の帰り道。今日中学を卒業した八神涼やがみりょう
すけ じょうしまきょうすけ さいとうはやと
介、城嶋恭介、斉藤隼人の三人はふらふらと帰路を歩いていた。

「何がやってられないんだよ涼介？」

恭介が呟いた。

「ははは・・・確かにこの三年間本当に何の問題も起こらず平和だったからなあ、物足りないと言えば物足りないな」

隼人が乗ってきた。

「・・・まったく俺はこんなつまらん日常を望んだわけじゃないってのに」

はあ・・・とため息をつく。

「ため息なんかついてると老化が進むぜ？」

笑いながら恭介は言った。

「ムッほつとけ」

そうやっていつもの感じで会話を続けていると

「なあ、高校行ったら何する？」

いきなり隼人が切り出した。

「んあ？やっぱあれだろ？いつもみたいに三人でバカやって・・・」

涼介は言いかけてやめた。

それじゃ変わらないじゃねえか。俺の望みはこの平凡な日常をぶっ壊して、最高にスリリングでエキサイティングな日々を満喫することだ。それには何か行動を・・・

「どうかしたか？涼介？」

隼人が顔を覗き込む

「また馬鹿なこと考えてるんじゃないの？」

恭介が茶化す。

そうだ。涼介は閃いた。

「生徒会にでも入るか？」

「はあ！？」

二人は顔を見合わせたあと涼介のほうに振り向く

「これから始まるうとする平凡な学園生活をぶっ壊す、そのためにまずは生徒の代表になって同じ不満を持つ人間を仲間にし、マニユ

アルどおりに仕事をして責任から逃げることだけに必死になっていて俺達のことを形だけ考えるふりをして結局自分のことしか考えていないクソ教師共をブツ潰して俺らが住みやすい世界を築き上げようぜ」

熱く語る涼介を見て

「・・・まあしょうがない。言いだすと止まらないからな涼介は・・・よし昔からのよしみだ、付き合ってやるよ」

といって恭介は隼人をチラリと見る

隼人は無言で頷いた

「そう！俺たちは学園の革命者だああ」

そう叫んで涼介は歩き始めた

二人も後に続く

これから始まる学園生活に胸を膨らまして・・・

続く

第一章 高校生活の幕開け（前書き）

とりあえず目標も決まった三人は私立城北高校に入学していく・・・

第一章 高校生活の幕開け

4月9日

三人は私立城北学園しりつじょうほくがくえんに入学した

「・・・まあ生徒会なんて入学当日に入れるもんじゃないし、立候補しても確実に入れるものじゃないしな」

ため息をつきながら涼介は呟いた

「まあ俺達中学の時生活態度最悪だったし、喧嘩もいっぱいしてたしな」

恭介が言った

「立候補しても当選する確実はゼロに近いぜ？」

隼人が続く

「うゝむ」

・・・考えても何も考えが浮かばない

「取り合えずそのことは置いて、運良く同じクラスになれたし教室行こうぜ」

「・・・そうだな。まあ後々いい考えが浮かぶさ」

三人はふらふらと1・Cの教室へ歩いて行つた

「えゝ今日からこのクラスを受け持つことになった担任の宮下直人だこれからよろしくな」

「副担任の水島玲子です。これからよろしくね新入生さん？」

思っていた以上に若くて美人な先生だったためか、男子グループの歡喜の声が聞こえる

「はいはい、うるさいぞお前ら。えゝそれでは手始めに一人ずつ自己紹介をしてもらう。まずはゝ出席番号1番赤川大介！」

「はい、えゝと出身中学は……」

お約束な自己紹介が終わり、簡単な学園の説明などがあつたあと今日の学業は終わった

「……平凡だな」涼介が呟いた

「まったくだな。せめてこうもつといかにも不良です。とかぐるぐるメガネかけて語尾にゝでヤンスって言うがり勉野郎がいればなあ」

恭介もつまらなそうに言つた

「まあ女の子のレベルが全体的に高いからいいじゃん」

笑いながら隼人が言う

「右に同じ」

二人がハモった

「何を男三人でむさ苦しい会話してるんだ？」

突然誰かが会話に突っ込んできた

「なんだよ美奈。暴力女は消えろ」

そこに立っていたのはポニーテールでいつも冷静で口が悪いがなぜか男子から人気のある三人の幼馴染、桐島美奈きりしまみなだった

「・・・殴る」

涼介は吹っ飛んだ。

「痛つてえ」

「まったく毎度毎度人のことを暴力女や殺戮マシンとか呼んで・・・」

「事実だろうが！」

頬を抑えながら涼介は反論する

「で、何話してたんだ？」

涼介をスルーして言った

「ああ。三人で相対性理論について語り合ってた」

笑いながら隼人は言った

キツと隼人を睨みつける

「冗談だよ。・・・ああそうだ美奈、俺達どうやったら生徒会に入れると思う？別に入れなくてもいいから取り合えずこの学校を俺達の手で変えられる方法を教えてくれ」

恭介は言った

「お前らが生徒会に入る？学校を変える？・・・あんた達この学校を廃校に追いやる気？」

「そこまで言うか！」

すかさず涼介が突っ込みを入れる

「まあ生徒会なんて簡単には入れるでしょ？普通の人はやりたがらないわ。あと問題なのは演説ね。みんなを納得させなければいけないから。」

美奈は簡潔に説明した

「ほほう演説か・・・」

涼介は考えるように呟いた

「内容は言い出しっぺの涼介が考えろよ」

隼人がニヤニヤしながら言った

「三人分のな」

恭介も悪ノリする

「・・・お前らなあ」

涼介はバツが悪そうな顔をする

「まあ生徒会への立候補にはまだ何力月もあるから、それまで生徒の信頼でも集めて票集めでもすれば？」

美奈が涼介の背中をぽんぽんと叩きながら言った

「おい美奈？そろそろ帰ろうよ」

「あゝうんわかった。それじゃあね、バカトリオ。まあせいぜい頑張んなさい」

と言ったあと美奈は友達と帰って行った

「さて俺達も帰るか」

「そうだな何力月も猶予があるんならゆっくり票集めでもしようぜ」

「よし帰ろう」

三人は顔を見合わせて頷き学校を後にした

続く

第一章 級長・・・

次の日

「・・・よしみんな今日は二日目ということでクラスでの役割を決めてもらおう」

H Rで突然宮下が言い始めた

「ついにこの時が来たな恭介？」

涼介が言った

「あ？何の話だ？」

「馬鹿野郎！このクラスの級長になることこそ生徒会入りの第一歩ではないか！」

涼介が熱く語る

「じゃあ勝手に入れよ少年。俺は楽な仕事を選ぶことにするから」

恭介はそう言うとなんか仕事を探し始めた

「まったくヤル気も根性もないヤローだなあ。なあ隼人？」

涼介は隼人の方を見る

「先生、俺はプリント配布係がいいです」

涼介の期待を見事に裏切り隼人はプリント配布係となった

「オイオイ、マジデスカ？」

涼介はしょぼくれる

「さて誰か級長になりたい者はいるか？できれば立候補してくれるとありがたいんだが・・・」

宮下先生はそう言ってみんなの方を見る

「ハイハイ、この俺がやってのけましょう！」

と勢いよく涼介は手を挙げた

どうせ級長という役職は俺が生きてきた人生の中で誰一人自らやる奴がいなかったのだ

「ふっ、決まったな・・・」

涼介がそう呟いた瞬間

「先生、私も級長に立候補でヤンス！」

誰かが立ち上がった

「なっなんですと！？」

三人が声を合わせて振り返ると一人の丸メガネをかけた痩せ顔の男

が立っていた

「私、鈴木英太郎すずきえいたろうは小学校の時からずっと級長という業務をやって来たでヤンス！こんなところで私の中の伝統を壊すわけにはいかないでヤンス！」

と言って涼介を睨みつけてきた

「まっまさか、眼鏡をかけて語尾にヤンスを付ける漫画の世界でしか見たことのない希少種がいうとは・・・」

涼介は絶句した。

どうやらこの男、他の学校じゃ有名ながり勉強郎らしい。

「というわけで級長はこの私に譲ってもらってヤンス」

「ふざけるなよ、この級長オタク野郎！この学園に革命起こす第一歩として級長の座は譲れねえんだよ！」涼介は睨み返ししながら言った

そうやって言い争っている間女子の級長は美奈に決まっていた

「えゝ、決まりそうにないから皆に多数決を取ってもらおうかな？」

とこの争いを見ていた宮下が提案した

「上等だ！その案のってやるぜ」

涼介がそう言う

「ふっふっふ初心者め、キャリアの違いを思い知るがいいでヤンス
！」

鈴木も納得したようだった

「じゃあとりあえず皆に納得してもらえような方針みたいなものを述べてください」

宮下がそう言つと

「まずは私から行くでヤンス」

といつて教卓へ向かった

「頑張れよ涼介」

とニヤニヤしながら二人が野次を飛ばしてきた

「・・・強敵だな」

涼介は呟いた

続く

第一章 VSがり勉メガネ

「えー私が級長に就きさえすればこの学級はこの学園一優秀な学級になるでヤンス、私はどの行動にも無駄がなく指示ができる自信があるでヤンス」

鈴木は自信たつぷりに語る

「この学級が全てのお手本になれることをここに約束するでヤンス」

クラスの反応はまあまあという感じであった

やりきったという感じで鈴木は教卓を後にする

チラリとこちらを一瞥しほくそ笑んだ後自分の席へ着いた

・・・ム力つく

「えーでは次、八神君よろしく」

宮下が言った

涼介は教卓に上がり口を開いた

「あゝ俺が言いたいのとはとりあえず一言」

「それで楽しいと思うか？」

・・・クラス中が静まり返った。みんな俺を凝視してやがる。俺は構わず続けた

「確かにさっき言ったこのがり勉級長オタク野郎が言ったことは正しいかもしれない。だがそうやって優等生ぶるのって楽しいか？俺は楽しくないね、そんなことしても最高につまらん日常が巡ってくるだけだ」

涼介は続けた

「だから俺の方針は自由だ、評判みたいになくだらねえことは気にせず俺達のやりたいようにやる・・・以上」

数秒の沈黙のあとクラス中から歓喜の声が出た

「やってくれるぜあの野郎」

恭介と隼人が顔を見合わせて呟く

涼介は皆に向かって握りコブシを高々と揚げると自分の席へ着いた

そのあと多数決が採られたが言うまでもなく大多数で涼介の勝利だった。そのあと鈴木は一人泣いていた

「あゝあ、あんたと一緒に級長なんて最低ね」

休み時間となり美奈が近づいて来てそう言い放った

「おいおいそりゃ言い過ぎだろうが美奈」

バツが悪そうな顔で涼介が言い返す

「ま、いいけど。そのかわり私に迷惑は絶対かけないでよ」

美奈は冷たく言い放った

「照れんなよ美奈。俺と級長ができて嬉しいんだろ？」

涼介はニヤニヤしながら言った

「・・・死にたい？」

美奈が笑みを作って殺意たつぷりに呟く

「申し訳ありませんでした！」

すかさず謝る

「まあ」

「え？」

「これからよろしくな美奈」

涼介が手を差し出す。美奈は顔を赤らめてその手をパチンとはたいて

「ばっ馬鹿、何よ急に改まって」

そついうと美奈は顔を背けてしまった。するとそこに

「ヒューヒューお熱いねえ二人とも」

とニヤニヤしながら恭介と隼人とが近づいて来る。

そのあと二人が美奈の手によってノックアウトされたのは言つまでもないだろう

そうやって今日の授業は全て終了した

・・・しかし美奈の奴ちよつと可愛かったな

「さて、お前ら何故に級長に立候補しなかったんだ？」

帰り道、涼介は不満げに二人に言った

「お前に勝ちを譲ってやったんだよ」

笑いながら恭介は言った

「そうだぞ涼介この中ではお前が全てにおいて優れているから俺達は身を引いたんだ」

恭介に続き隼人もそんなことを言った

「え？そつか？いやあ俺も前々からそう思ってたんだよね。俺ってやつは生まれた時から天才だったんだよ。わははははは」

涼介は満足げに言った

「調子に乗るな！」

二人は涼介にラリアットをかましてダッシュで逃げて行った

「・・・にやろつ共、ぶつ殺す！」

涼介はゆっくり立ち上がり二人を猛スピードで追って行った

続く

第一章 会議

級長になってから数日が過ぎた

「……めんどくせえ」

涼介が級長に与えられた仕事をこなしながらそう呟く

「……あんたがやりたいって言ったんでしょうが」

美奈に頭を叩かれる

「いや……やったこと無かったからさあ」

涼介がぼやく

「まったく昔からあんたは後先考えずに行動するわね」

はあ。とため息をつきながら美奈が言う

「……二年になったらもう級長やめるわ。よし終わったあああ」

涼介は席を立ちあくびをついた

「まったく、だらしないわね。ほら職員室行くわよ」

「へいへい。あーだりい」涼介は悪態をつきながらついて行く

八神家

「さて諸君今日集まってもらったのは他でもない」

涼介の家にいつもの二人が集められていた

「んだよ涼介、金なら貸さんぞ」

「つーか俺達客だぞ？さつさとお茶菓子用意しやがれコラ」

二人から野次が飛ぶ

「ええいうるさい。黙って聞け愚民共が」

涼介は続ける

「やっぱ生徒会・・・つーかこの学園を仕切るには生徒からの絶大な信用がいる。そういくら喧嘩が強くてもダメだってことだ、力だけじゃ何も解決に至らないのだ」

「で？何が言いたい」

恭介が突っ込む

「まあ生徒からの信頼を得るにはやっぱ生徒個人個人の問題を解決していくことだ」

涼介は熱弁する

「で？具体的には」

隼人が菓子をボリボリ食いながら聞いてきた

「うむ。だからこそ今日貴様らに集まってもらった」

「はあ？」

「まったく意味がわからんぞ涼介」

「察するに現在うちのクラスは何も問題の起こらず平凡なクラスだ」

「・・・まだ入学してちょっとしか経ってないだろ？だから皆はまだ緊張してるんだよ。だから皆がクラスに慣れてきたところで初めて問題が出てくる。とりあえずその時まで待つことだな涼介」

「いやいやいや、俺達票集めしなきゃならないんだぜ？そんな時期まで待つてちゃ生徒総会が始まっちゃう。それまでに何件か問題解決しなきゃならんのだ」

「まったく無茶なことを言うなよ涼介」

「問題がない、それが問題だ！！・・・俺今いいこと言ったよな？諸君ノートに書き留めておけテストに出るぞ」

「言ってるボケ」

そうやって涼介と恭介が馬鹿な言い合いをしていると

「なあそう言えば噂で聞いたんだが、うちのクラスに田中つていたろ？あいつ青海高校の不良グループのバイク誤って倒したのがきつ

かけで、いじめやカツアゲやらの被害にあっているらしいぞ?」

隼人が急に切り出した

「・・・それだ。それだよ隼人そういう問題こそ俺が待ち望んでいたものなんだよ」

涼介がパツと顔を輝かせる

「確かに解決すりやかなり信頼は集まるが具体的に何すりやいいんだ?」

恭介が聞いて来る

「まあそいつについては本人に直接聞いてみるのが一番だろ?」

隼人が言った

「・・・さあて面白くなってきやがった」

今日の会議はこれで終了しみんな解散した

続く

第二章 敵は青海編 説得

路地裏

「おい、ちゃんと持って来たんだろうな」

「・・・はい」

「よし見せる」

そう言われて金を見せる

「くつくつく毎度ご苦労さん！」

男は金を見せた男の腹を思い切り殴る

「・・・あつあが・・・ううううう」

男は地面に倒れこむ

「まったく良かったなあ？俺らのバイク傷つけてこれくらいで済んでよお！」

うずくまっている男に何発も蹴りを入れる

「・・・ゆっ・・・ごふっ・・・はあはあ・・・許して・・・ください・・・」

「つけ、来週は五万持ってこい」

「……うう……五万は……無理です……」

「んだとてめえ？もういつぺん言ってみろコラア！！」

とどめの蹴りを入れた後倒れてる男の頭に足を置き

「持ってこなかったら殺しちゃうよー？ひやははははは」

男は唾を吐いたあとその場を去っていく

「いやー田中ちゃんはホントいい金もうけの道具だわ」

「田代さんやりすぎたんじゃないすか？」

外を見張っていた舎弟らしき男が駆け寄ってきて言った

「いいんだよ、それよりこれからどつか遊びに行こうぜ。ちょうど金もここにあることだしな。ひやはは」

「マジっすか？今日は遊び放題っすね」

馬鹿笑いしながら二人は去っていく

「……うぐっ……ちく……しょう……チキシヨオオ！！」

次の日

「おい、どれが田中だ？」

涼介が二人に聞く

「・・・お前級長だろ？そろそろクラス全員の名前と顔くらい覚えろよ」

恭介が突っ込む

「ほら俺人の名前とか覚えるの苦手だからさあ」

笑いながら涼介が言う

「はぁ・・・あれが田中だ」

隼人が指をさす

そこにいたのは見た感じひ弱そうでクラスから孤立してそんな感じの男、たなかこうじ田中孝司がいた

「いかにもって感じだな」

涼介が呟く

「ああ、どうやって近づく？」

「取り合えず・・・何日か張り込むか？」

「・・・ドラマの見すぎだ」

「だったら聞き込みだな。奴の近況を調べる」

「まゝ無難な考えだな」

「うゝし行動開始だ」

涼介が動いた

「つゝかあいつの近況なんて誰に聞いたら分かるんだよ」

恭介と隼人は立ち尽くす

「おい田中、最近青海校の連中にボコられてんだってな？」

「ちょ・・・直接行きやがったー！！！！」

二人は愕然とする

「・・・」

田中は黙っている

「おい聞いてんのか田中？」

涼介は続ける

「・・・ほつといってくれ」

「あ？」

「だからほつといてよ」

田中はそう言い放った

「お前・・・悔しくないのか？」

「そりゃ悔しいさ！でもどうしろってんだよ、僕は気弱だし喧嘩だつて強くない、おまけに相手は有名な不良でしかも舎弟がいる。勝てるわけないじゃないか！」

「・・・はあ。やってみてもないのにすぐに諦めて、このままずつとそいつらに虐められてそれでお前の人生満足だったのか？」

「・・・」

「本当ににそのままでいいのか？自分を変えたくないのか？やられたまんまでお前は終わっちゃうのか？やり返したくないのか？」

「・・・っ！」

「そうやって何もしないでいる奴を負け犬っていうんだよ！おまえは負け犬のまま生きていきたいのか？どうなんだよ！」

「・・・嫌だ」

「なんだって？」

「負け犬で終わるのは嫌だ！奴に復讐したい！ぶん殴ってやりたい！」

田中は叫んだ

「ふっ。お前なら絶対そう言つと信じていたぜ田中」

涼介は田中の肩をぽんぽん叩きながら言つた

「・・・でも八神君と話すのって確か初めてでしたよね？」

「気にするな少年。気にした時点で貴様の負けだ」

「はぁ・・・」

「まあ詳しいことは後日話す。それまで体でも鍛えとけ」

そう言つて涼介は二人の元へ戻つて行つた

「・・・アホだな」

「まったくだ」

「誰がアホだ」

「で？このあとどうすんの？」

恭介が問う

「・・・なるようになるさ」

涼介はフツと笑つと遠い眼をして窓の外を眺めた

「何も考えてねえのかよ、このボケ！」

そのあと涼介は二人から何回か蹴りをもらった

続く

第二章 敵は青海編 会議2

「・・・田中の野郎、とうとう金払いに来なかったな」

チツと舌を鳴らす

「これからどうするんですか田代さん？」

舎弟が訊いてきた

「・・・もちろんお仕置きが必要だろうねえ。二度と俺達に刃向えないくらいに心も体もボロボロにしてやるまでさ」

「さっすが田代さん。これから楽しみますねえ」

ニヤリと舎弟は笑う

「さーてどうやって料理しようかねえ」

そう言う田代は、とても残忍な笑みを浮かべて笑っていた

城北高校教室

「さて、どうしたものか」

休み時間となり田中を含めて集まった四人は、近々始まる青海との

決戦について話していた

「つーかその前におまえをやった相手は一体どんな奴だ？」

「・・・確か、田代ていう奴です。確か舎弟が何人かついていました」

「・・・舎弟っていつの時代の人間だよそいつ」

「つーか田代って聞いたことあるぞ俺」

恭介が言った

「マジで？何？お友達？」

涼介が茶化す

「言ってる馬鹿。田代って言えば青海で一番有名な不良、梶原のお気に入りの一人だよ」

「梶原の！？」

涼介と隼人が声をそろえて驚いた

「あの・・・梶原って？」

田中が訊いてきた

「・・・ああ。梶原ってのは、ほら二年前ちよつと注意した教師を癪に障ったという理由だけでバットで顔を殴打して全治六カ月の重傷負わせて年少・・・つまり少年院に送られたイカレ野郎だよ。確

かこの事件はニュースで報じられたからお前も知ってるだろ？」

涼介が説明した

「・・・思い出しました。その他にも色々やった人ですね？」

「ああそうだ。しかしこいつはちょっと厄介なことになったな」

涼介が考えこむ

「確か梶原は先月年少でたらしいぜ」

隼人が言う

「おいおい政府はあんなイカレ野郎を世間に野放しにして何やってるんだよ」

「まったくだ。しかし田代だけをやるのは簡単だろうが、お気に入りがやられて黙ってる奴じゃないだろ？ 梶原は」

恭介が言った

「そりやそうだろうな。俺だつて仲間がやられたら黙ってなんかいられないぜ」

「まあ確かに面倒だな。でも今回の目標は田代だ。梶原のことは後々解決すればいい。」

そして涼介は大きく息を吸って真剣な顔で言った

「・・・田中」

「何ですか？」

「分かっていると思うが田代をやるのはお前だ」

「・・・」

田中は黙った

「今まで苦汁を飲まされたのは俺たちじゃない。だから俺たちが田代をやっても意味が無いんだ」

田中は黙ったまま聞いていた

「だからと言って俺たちは何も協力しないわけじゃない。確か田代は舎弟を連れているといっていたな」

「・・・はい」

「俺たちは舎弟の方をやる」

恭介達の方に目をやると、仕方ないといった様子で軽く頷いた

「まあ、とりあえず今のままでは田代にや勝てないだろうな」

田中黙って目を伏せる

「そう心配するな。俺等が喧嘩のやり方教えてやるよ」

涼介が自信満々で言う

「一応中学んときは俺達に逆らう奴は居なかったんだぜ？」

恭介も続く

「逆らう奴はたくさんいただろ？ただ単に向かってくる奴をブチのめして言う事聞かせてただけじゃねえか」

隼人が訂正する

「・・・まあそういう訳だからとにかく、そこらへんの奴等よりかは俺達は強いってことだ」

涼介が言った

「まあ、俺らに鍛えられればお前は田代に勝てるさ。話を聞くに、奴は自分より強い者に対しては親しく近づき、弱い者に対しては暴力で支配する典型的な臆病者タイプだ。たぶん喧嘩の実力はそれほど高くないだろうよ」

「だからお前にも勝つチャンスがある。とにかく今までのお前は奴に対してとても弱腰で、なされるがままにやられていた。まずそこから変えないといけないな。」

「はぁ・・・具体的にどうすれば？」

田中が訊いて来る

「とりあえず身なりをフルモデルチェンジだな。今日学校終わったらちよっと付き合え」

「・・・はい」

田中は不安そうな顔をしながらも涼介の言葉に頷いた

そして放課後

「ちょっと涼介どこ行くのよ」

美奈が怒った表情で尋ねる

「すまないがこれからとても大切な用事があるのだ」

そう言って涼介は教室を出て行こうとする

しかし後ろから首を絞められた

「待ちなさい。先生に頼まれたこの仕事はどうする気なの？」

「・・・ちょ・・・死ぬ・・・」

「まさか私に全部押しつける気じゃないでしょうね？」

とても怖い笑みを浮かべながら美奈は訊く

「いや・・・あの・・・その・・・」

「仕事する？それともこの世からバイバイする？」

「どっちも嫌だー!!!」

涼介はそう叫ぶと全力疾走で逃げ去った

「ちょ、ちよつと涼介！？待ちなさい！」

後ろから何か聞こえたような気がしたが自分に幻聴だと言い聞かせ
我武者羅に逃げた

「はぁ・・・せつかく仕事終わった後一緒に帰ろうと思ってたのに。
・・・バカ」

美奈はそう呟くと一人教室に戻って行った

「おせーぞ涼介」

校門に行くと恭介、隼人そして田中が待っていた

「はぁ・・・はぁ・・・すまん。ちよつと恐ろしい魔女から逃げていた
のだ」

息を切らしながら涼介が言った

「なんだ美奈か？おおかた仕事放り出して逃げて来たんだろ？」

恭介が笑いながら言った

「まあそんなところだ」

「とりあえず早く行こうぜ。もたもたしてたら日が暮れちまう」

隼人が促す

「そうだな。それじゃあレッツゴー」

そう言って四人は町へ歩き出して行った

続く

第二章 敵は青海編 変化

「さて、まずどこから変えようかね」

涼介が呟く

「やはり服装からだろう」

隼人が言う

「俺らがいつも行く店にしようぜ。あそこの店なら事情話せばタダで貸してくれるかも知れんぞ」

恭介が言っている店は美奈を含めた四人が幼い頃からよく行く店のことである

「そいじゃ、行ってみるか」

四人は店の方へ向って行った

駅前に向した小さな洋服店”アサギ・インフィニット”そこが涼介達の行きつけの店である

「おーす、タケちゃん元気？」

店に入るなり大声で涼介は言った

「あら涼ちゃん。残念だけどお父さんは今いないわよ」

店の奥から出てきたのは涼介達より三つ上のお姉さんあ的な存在の浅木舞さきまいであつた。髪の毛はストレートで体型はスレンダー、容姿は超が付く美人でありさらには性格もいいというまさに文句なしの女性ひとである

「おつす舞ちゃん。いつものことながらお美しい、結婚してくれ」

「そ〜ねえ、涼ちゃんなら構わないわよ〜」

「わ〜い結婚だあ〜」

「いい加減にしろ」

この状況を見かねて恭介が突っ込む

「つーかタケちゃんどこ行つたの？」

隼人が訊く

「えーともうすぐ帰ってくるはずよ。あっほら」

振り返るとそこにはサングラスを掛けあごひげを生やしたオッサン、浅木武弘の姿があつた
あさぎたけひろ

「よ〜タケちゃん元気してた？」

涼介がパツと顔を輝かせ手を振る

「おーどうしたクソガキども、何か用かー？」

「今日は娘さんをもらいに来ました」

「そうか、持ってけ持ってけ」

「やったー……誰か止めろよ」

涼介が周りを見ると恭介たちは無視してすでに田中の服を探し始めていた

「おい、てめえら！この空気どうしてくれるんだよ！」

「……貴様が勝手に作りだしたんだろうが」

恭介が冷淡に突っ込む

「……冷たい奴だな」

涼介も観念して服を探し始めた

「おーいタケちゃん。特攻服置いてないか？」

「んなもん置いてるわけねえだろ」

「品揃え悪いなあ」

涼介がぶつぶつ文句を言う

「おっ、これなんかいんじゃないか？」

涼介が手に取ったのは赤いジャケットだった

「これの下に黒のＴシャツを・・・ほんでもってジーパンを・・・」

一通り決めると田中を試着室に押し込めいろいろ試してみる

数十分試着を済ますと結局最初に涼介が言ってた服で落ち着いた

「さて・・・邪魔したなタケちゃん」

手を振って涼介達が帰ろうとすると後ろから肩を掴まれた

「おいクソガキ・・・お勘定がまだだぜ？」

タケちゃんが凄味を増した声で呟く

「いやーその・・・田中！」

「はい」

「支払い・・・頼んだ」

「はい!？」

とりあえずこの場は田中に支払わせてなんとかタケちゃんから脱出した

「イヤー買った買った」

涼介が満足そうに言う

「で次はどうするんだ？」

隼人が尋ねる

「やはり頭髮だろう。この頭じゃなめられるぜ」

恭介が答えた

「うむ、確かにそうだな」

「さて、どうしようかね？気合い入れて坊主にするか、それとも今流行りの髪型にしてダサイ髪型からオサラバするか」

「うーむやっぱショートカットで頭ツンツンにした方がいいだろう。それにグラサン掛けたら格闘家っぽくね？」

「・・・まあその辺が妥当だろうな」

意見が一致したところで四人は美容院に向かった

1時間後

「おーおーこれはなかなかだ」

涼介が満足げな顔をする

「・・・そ、そうですか？」

田中は少し不安げな顔をする

「おいおい田中君、そんな言葉づかいじゃだめだ。今から一切敬語は使うな」

「え・・・は、はい」

「・・・まったく。今使うなと言っただろうが！」

「すみません！」

「使うなあああ！」

「はい！」

さらに一時間経過

「・・・よし、最後は喧嘩の方法だな」

「おう」

「お、なかなか型にはまって来たな」

田中はこの一時間で遂に敬語から脱出した

「まあ喧嘩は取り合えず心が折れた時点で終わりだ、だから思い失うまで相手を殺すつもりでいろ」

「うす・・・」

「あとは単純。ただ本気で相手を殴るだけだ。テクニックなんて要

らないからな。これは格闘技ではない、喧嘩だ。ただ相手をぶつ殺すその気持ちが大きければ今回の相手は勝てるはずだ。しっかり自信を持って」

「うす」

「よし今日はこれで解散だ。田中はこれから一週間後の決戦までただ拳を鍛えろ。何発相手殴っても壊れないようにな」

「うす」

「よしじゃあ解散」

一人帰り道の違う田中と別れ三人は家の方へ歩き始めた

「さて大丈夫かね？」

恭介が訊く

「ああ。奴ならやってくれるさ」

涼介が自信満々で言う

「俺もいけると思うぜ」

隼人も涼介に賛同する

「さて、俺らも気合入れないとな」

涼介が背伸びをしながら言った

「ああ、相手の数がわからん以上こちらも警戒しないと」

隼人が言った

「でもまあ、俺らなら雑魚の十や二十なんて余裕だろ？」

恭介が笑いながら言った

「当然！」

涼介と隼人が口をそろえて言った

そして夜は更け、三人はそれぞれ帰路へ着いた

続く

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9647c/>

学園革命

2010年12月31日21時30分発行